The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ de Laine, Marlene., ”Fieldwork, Participation and Practice : Ethics and Dilemmas in Qualitative Research”, Sage Publications, UK. 2000.
Author(s)	心光, 世津子
Citation	年報人間科学. 2002, 23-2, p. 411-415
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4278
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

de Laine, Marlene.

Fieldwork, Participation and Practice: Ethics and Dilemmas in Qualitative Research,

Sage Publications, UK. 2000.

心光世津子

1

研究上の倫理的トラブルは誰しも避けたいことである。研究上生じうる問題を把握し倫理的配慮をすることは、研究対象者の人権を守るだけでなく、研究者自身の立場を守ることにもなる。しかし、前例に学ぶことは難しい。岩本(一九九七)が指摘するように、「何らかの問題を耳にした研究者は少なくないと思われるが、現在の日本では公的に語られたり公的に記録されることはまずない」のであるから(岩本 1997:70)。

秘密の保守やインフォームド・コンセントなど、研究の基本ルールとも言える倫理綱領は、研究の準備段階から目を通しておく必要があるだろう[1]。しかし、質的研究、とくに対象者との相互行為を伴うフィールドワークの各局面で出会うジレンマに、倫理綱領が具体的な解決策を示してくれるわけではない。「フィールドワークをめぐる倫理上の問題は、日常生活を作り上げている複雑な状況に対する慎重な配慮が要求されるものであり、文脈抜きで外側だけから判断しただけでは分かりにくい事柄があまりにも多い」(佐藤 1992:223)のである。

そのためか、フィールドワークの倫理的問題を主題とする本は、和書ではほとんどない。洋書でも、論集というかたちで出版された本はいくつかあるが、一人の著者により体系的に議論されたものは非常に少ない。本書は、その数少ない試みの一つと言えよう。

著者のde Laineは、オーストラリアにあるFlinders大学で看護お

よび公衆衛生の教鞭をとっていたが、現在は独立して質的研究のコンサルタント(qualitative research consultant)をしている。彼女は本書で、社会学、人類学、心理学など様々な分野の質的研究に関連する文献から、倫理的ジレンマに関する議論をレヴューしている。

著者は言う。「倫理的、道徳的ジレンマは、避けられないことであり、すなわちフィールドワークをしていく際の職業上の危険(occupational hazard)である。ジレンマや両面感情は必ずしも事前に分かるわけでないし、実際には事前に対策を立てておくことはできない」(二-三)。「倫理的ジレンマは、『正しい』決定というものがなく、「ただ思慮深く下され、おそらく他の選択肢よりも『適切な』決定」(Hill, Glaser and Harden,1995:19)があるのみ、という状況である」(三)。著者は、このようにフィールドワークをめぐる倫理的問題の複雑さを強調し、各章で倫理的、道徳的問題やジレンマがどのように発生し、どのように解決あるいは回避できるかを描いている。本書のねらいは、フィールドでの活動が有害となる可能性を研究者がより理解する必要があると示すことである。さらに、そうすることで、研究上のジレンマを扱う方法を読者が打ち出せるよう促していくことである。

2

本書は、全九章の構成である。一章の序論と九章の結論以外は、フィールドに入る段階から記述に至るまでの、研究の各局面で生じうるジレンマについて、様々な研究例を紹介しながら議論している。

二章「質的フィールドワーカーの精神的閲歴(The moral career of the qualitative fieldworker)」。この章で用いられている「精神的閲歴」は、E.Goffmanの『アサイラム』に由来する。この概念はここで、T.A.Schwandtの議論に沿って、フィールドワーカーの精神的な局面を明らかにする枠組となっている。

この枠組を受けて、次にN.K.Denzinによる二つの倫理モデルが提示される。一つは伝統的倫理モデル(traditional ethical model)、もう一つはフェミニスト・コミュニタリアン・モデル(feminist communitarian model)である。前者はさらに、倫理的絶対主義(ethical absolutism)と倫理的相対主義(ethical relativism)にわかれる。倫理的絶対主義では、研究者はその協力者に必ず研究に先だって目的や役割の説明をし、同意を得なければならない。また、倫理的相対主義では、説明や同意については、研究者の良心にまかせられている。一方、フェミニスト・コミュニタリアン・モデルの立場の研究者は、セラピストやケア提供者などとして、対象者に支持的に関わる点で伝統的モデルとは根本的に異なる。説明や同意よりもむしろ、ケアを基礎とした倫理である。このモデルでは、必ず個人的に関わること、政治的にコミットしていること、実証主義のような道徳的に忠実な観察者でないことが想定される。

この章では、(極端に言えば)客観的で中立な観察者かあるいは、精神的にまき込まれた研究者か、という選択肢が与えられる。その時々でどの選択をするかにより、フィールドワークで生じるジレン

マも異なってくるだろう。

三章「台本と自己の演出(Scripts and staging the self)」。台本は、外見(appearances)や演技(performance)を演出することを表わすメタファーとして用いられている。これは、アクセスする前にあらかじめ用意されるものである。フィールドにアクセスする時に、研究者の振る舞いや、対象者とその状況に応じて研究者の立場が決まり、それによってその後の研究者と対象者との関係が決まってしまう。皮肉なのは、何がその場で「適切」なのか、事前にはよく分からないことである。この章では、そういったフィールドにアクセスする際の問題や対象者との距離に関する問題が示されている。台本を用意していても生じうる問題として、情報を得るよりも先に関係が深まることで起こる「親密さのパラドクス」、さらに、裏切りの危険やアクセスの障壁などが論じられる。

四章「裏の領域と繊細な方法(Back regions and sensitive method)」。この章でとりあげられるのは、裏の領域、例えば廊下や化粧室での会話などで得たデータを用いることによる問題である。そこでは、リラックスした状況でインフォーマルな情報が得られる。どんなにインフォームド・コンセントがされていようとも、それを研究上のデータとすれば、その用い方によって対象者は裏切られたと感じるだろう。これはインフォームド・コンセントがされていても、研究者が倫理的であるということの保証にはならない例である。

五章「役割と演技(Roles and performance)」。この章では、研究者の役割の様々な分類（①完全なる参加者／完全なる観察者／観察者としての参加者／参加者としての観察者、②周辺的メンバー／積極的メンバー／完全なメンバー、③部内者／部外者）を紹介し、その研究に与える影響などについて考察している。この議論に関連して、オーバーラポールのデータ収集過程への有害性について触れている。さらに、この章では、研究者でもあり友人でもある場合や、研究者でかつセラピストでかつ友人である場合など、対象者に対して複数の役割をとることでの葛藤についても触れている。

六章「倫理的ジレンマ:様々な聴衆の要求と期待(Ethical dilemmas: the demands and expectations of various audiences)」。ここでいう聴衆とは、研究の目的によってフィールドへのアクセスを禁止する力を持った組織内の人物や研究を進めていく上での案内役、アカデミックな領域の共同研究者、編者、スーパーバイザーなどである。これら聴衆からの要求と期待、また聴衆に対して負う責任からジレンマが生じる。これに対しては倫理コードやガイドラインにしたがって決定していかねばならない。しかしその一方で、研究者は、研究の中で聴衆の要求や期待とも共存できるように努力する必要がある。

七章「フィールドノーツ:倫理と感情的自己(Field notes: ethics and the emotional self)」。フィールドワークをしていく上で、研究者は葛藤や戸惑い、怒りなど様々な感情を経験する。現代の研究者は、自身がフィールドで経験したことだけでなく、解釈の方法として感情の経験にも注意を向けている。人間関係における感情のダイナミクスの記述と分析がなければ、発見したものの解釈や経験の理

解に必要な、枠組や文脈の重要な部分が失われてしまう、と著者は言う。この章では、感情を分析の対象とした研究として、A.Hoschildの感情労働(emotion work)、H.Garfinkelの降格儀礼(degradation ceremony)、N.K.Denzinのエピファニー(epiphanies)をとりあげている。

八章「テクスト上での自己および他者の『印象操作』(Textual 'impression management' of self and others)」。この章では、「テクストの管理(textual management)」つまり、最終産物を書く際の文章作法が整理されている。本文中で研究者自身の表わし方、対象者の話や対象者自身の表わし方によって生じる問題がこの章の主な焦点である。また、暴露や出版に関する問題にも触れている。こういった問題は、対象者や共同研究者がきちんと知らされていない、あるいはかつて知らされていた方法と発表されたものが違っているような場合に起こるだろう。研究計画書の段階から注意が必要である。

3

著者de Laineが本書の冒頭で述べているように、フィールドワークにはこれが正しいという方法はなく、倫理的な問題は避けることができない。質的研究はフレキシブルに戦略を用いられるところにその利点があるが、その相互行為の中でトラブルがおこらないよう状況に応じてフレキシブルに対応せねばならない。倫理綱領に従い、全くその通りに行動しようとすると、研究者はフィールドで身動きができなくなるだろう。しかし、de Laineがこの問題に対して悲観的である様子は見られない。おそらく、過去の研究例を検討し具体的に問題に取り組むことで、その対策が少しずつ見えてくると著者が確信しているからだろう。「こういう場合はこうすべき」というような明快な答えはないにしても、本書は、実際に研究場面でジレンマに出会った時、一寸した知識や選択肢を与えてくれるだろう。南(一九九七)は、「参加観察における倫理次元への配慮は、参加そのものを否定する方向に向かうのではなく、参加の様式の吟味に向かうべき」と考察しているが、本書はまさにこの「参加の様式の吟味」に有用と思われる。

ただ、三章以降では、場面場面での実際的な問題が扱われるに留まり、二章で紹介された倫理モデルの違いによりどのような問題が想定されるか、関連付けて述べられておらず、はっきりしない。これは、それぞれのモデルにおいて何が倫理的なのか、何が道徳的なのか、という問いへとつながるだろう。このような、より根本的な問いへの道筋も、著者は示しておく必要があったのではないか。また、このことはフィールドワークに関わる研究者も取り組んでいかねばならない問題であろう。

それが今後の課題として残るにしても、本書はフィールドワークをする際の副読本として役立つであろう。

【注】

(1) 日本では、まだ倫理綱領が十分に整備されているとは言い難い。今のところ、倫理的問題についての議論のほとんどは、主に海外、とくにアメリカで制定された綱領をもとになされている。

岩本健良、一九九七「社会制度としての研究倫理―アメリカ社会学会の実例と日本の社会学者の課題」、『理論と方法』、一二巻一号、六九 - 八四

Hill,M., Glaser,K. and Harden,J.(1995). A feminist model for ethical decision making. In E.J.Rave and C.C.Larsen (eds).Ethical decision making in therapy: feminist perspectives. New York: Guilford Press. pp.18-37.

南博文、一九九七、「現場研究と研究者倫理をめぐって:フィールドワーカーのジレンマ」、『発達心理学研究』、八巻一号、六九 - 七一

佐藤郁哉、一九九二、『フィールドワーク―書を持って街へ出よう』、初版、新曜社